

Exemplum としての “The Friar’s Tale”

柴 田 竹 夫

1

チャーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) の各々の話は、カンタベリー寺院への巡礼という一つの枠 (frame) の中にある。更に各々の話は、宿の亭主 (Host) を審判役と記録係 (814) として、巡礼の行き帰りにおいて一番為になり、一番面白い (798) 話をした者が、他の巡礼者の奢りで、夕食をご馳走になるという「物語合戦」というもう一つの枠の中にも置かれている。“The Friar’s Tale” (「托鉢修道士の話」) とそれに続く “The Summoner’s Tale” (「教会裁判所召喚吏の話」) も物語合戦を行う。

“The Friar’s Prologue” (「托鉢修道士の話の前口上」) に見られる様に、the Friar は話を語り始める前に不倶戴天の敵である the Summoner を散々扱き下ろすも、宿の亭主に促されて語り始める。the Friar の話は、いわゆる exemplum (「教訓話」) であって、the Summoner を引き合いに出して、the Friar との確執をもとに、面白くて、為になる話の語りをめざす。

本稿では exemplum としての “The Friar’s Tale” における悪魔と the Summoner の奇妙な関係をもとに、the Friar の言う教訓 (a moral) とはいかなるもので、チャーサーはそれをどの様に読者 (聴衆) に伝えようとしているかを探る。

2

まずは the Summoner に対していつもしかめっ面をする (1266) the Friar が、その話の前口上において、いかに the Summoner を揶揄嘲弄しているかを見る。

旅の慰めには冗談 (game, 1275) が必要であるからと、the Friar は面白いけれども、the Summoner の悪口しか言えない (1281) 話をしようと言う。Summoners なんてのは、姦淫の罪の召喚状を持って走り回り、ぶたれるのが関の山なんだとも言う。それに対して、地位に相応しく丁重で慇懃でなければならないと宿の亭主は the Friar を戒める。

すると the Summoner は、それに負けじとこう言う。the Friar なんてのは、おべっか使いで (1294)、やつらの様々な悪行 (cryme, 1295) を暴露してやると息巻く。話の審判役の宿

の亭主は、“In compaignye we wol have no debaat.” (1288) と仲裁に入る。あくまでも「物語合戦」をめざしているのであって、争いではない。

かくして the Summoner を罵倒する the Friar は、宿の亭主に促されて、the Summoner の悪行の話を語り始める。

語り手 the Friar は、まずは宗教裁判所長でもあった副監督 (erchedekon, 1302) なる、好色漢や十分の一税の払いが滞っている者などに対し、管轄区域内で様々な罪に対する罰を与える力を持つ者について語り始める。the Summoner は、実はこの副監督の手下であり (1321)、権力を傘に着て、抜け目無く、おのれの「利益」を得る所を教えてくれるスパイの一团 (つまり女衒たち [bawds, 1339]) を抱えている。

the Friar は更に続ける。the Summoner の「悪行」を語るに容赦しない the Friar は、the Summonerこそ「偽りの盗人」(false thief, 1338) であると罵倒する。それというのも the Summoner は、無法な金儲けの術を知っているからである。

He took hymself a greet profit therby;
His maister knew nat alwey what he wan.
Withouten mandement a lewed man
He koude somne, on peyne of Cristes curs,
And they were glade for to fille his purs
And make hym grete feestes atte nale. (1344-9)

the Summoner の金儲けのやり方とは次のとおりである。女衒の配する売春婦 (wenche, 1359) と寝た男を、「偽造の召喚状」(a feyned mandement, 1360) を持って宗教裁判所にこの二人を召喚し、男を脅しては金を巻き上げて、女は放免してやるといったやり方を始めとして、二年かかって話し尽せない程の、「賄賂」(bribery, 1367) を取るといったやり方である。彼は筋金入りの「偽りの盗人」で、自分の親分からも、彼の収入の半分しか渡さず、あと半分は自分のものとする。

更に the Summoner は、ずる賢い好色漢 (a sly leccheur, 1372) や姦夫 (an avowtier, 1372) や情人 (paramour, 1372) を嗅ぎ分ける鋭い能力を有するが、それは金儲け (the fruyt of al his rente, 1373) の為に使われている。

かくして the Friar は the Summoner の金にまつわる「悪行」(1328) を暴露する。

ここに見られる the Summoner の姿は、the Friar の見る姿であるばかりでなく、当時の Summoners の姿でもあるわけで、“the Friar’s Tale”における the Friar と the Summoner の間の確執がいかにばかりかをカンタベリー巡礼者のみならず 読者(聴衆)も知る。

次に “The Friar’s Tale” に続く, “The Summoner’s Prologue” において, the Summoner が, 語り手 the Friar に対してどのような反応を示したかを見る。

“The Friar’s Tale” を聴き終えると, 罵倒された the Summoner は, 心が狂ったようになり, 怒りで体を震わせる (1666-7)。そして「偽りの」(false, 1670) Friar の嘘に対して, the Summoner は, the Friarこそ悪魔 (feendes) とそうかけ離れたものではない (1674) と罵って, 巡礼者に向かって話を語る許しを乞う。

語り手 the Summoner は, Friars の vision を語る。the Friar を悪魔の元に連れて行くこと (1686), 悪魔の尻 (1705) の中から群れをなして Friars が飛び出して来て, 再びその尻の中に戻ることを。そして神は, 恩寵 (grace, 1702) をもって the Friar の魂をもとの身体に戻す (1700-3) こと。the Friar は, 心の中に悪魔の尻が残り, 恐怖に打ち震えること。

この呪われた the Friar (this cursed Frere, 1707) が悪魔と結託していることを, 地獄の vision を通して読者 (聴衆) の目に焼き付けて, “The Friar’s Tale” の語り手に対して the Summoner は手厳しく一矢を報いる。

この様に, “The Friar’s Prologue”, “The Friar’s Tale” 及び “The Summoner’s Prologue” からは, the Friar と the Summoner の両者の対立, 確執の激しさが極めて明白に見て取れる。

次に, 獲物をねらう the Summoner が反対に悪魔に捕らわれてしまうのはなぜか。その理由を探る。“The Friar’s Tale” において the Summoner の狙う獲物は二人いる。一人は馬方 (a cartere, 1540) で, もう一人は寡婦の老婆 (widwes, 1581)。この馬方の荷馬車がぬかるみに車輪をとられて動けなくなっている時, 馬方は次の様に毒づく。

“Hayt, Brok! Hayt, Scot! What spare ye for thr stones?

The feend,” quod he, “yow fecche, body and bones,

As ferforthly as evere were ye foled,

So muche wo as I have with yow tholed!

The devel have al, bothe hors and cart and hey!” (1543-7)

「悪魔がお前を捕まえろ, なにもかも持っていくがいい。」と悪態を吐く馬方に対して, the Summoner は馬方の言葉通り, 干草も荷馬車も三頭の馬車馬も獲物として捕らえればよいと「兄弟」(brother, 1551) の悪魔に耳打ちするが, 悪魔はきっぱりと反対する。その理由はと

言う、次の様である。

It is nat his entente, trust me weel.
Axe hym thyself, if thou nat trowest me;
Or elles stynt a while, and thou shalt see.” (1556-8)

馬方の言葉は、「本心」(entente, 1556) から出た言葉ではないからである。

イエス・キリスト (Jhesu Crist, 1561) の恩寵を得てぬかるみから荷馬車を脱出出来た事から (1561-5) 悪魔は, the Summoner に, 「馬方の言う事と考えている事は別である」 (“The carl spak oo thing, but he thoghte another,” 1568) 事を示す。つまり馬方は本心から毒づいたわけではなく、それは単なる苛立ちによる毒づきであるからこそ「イエス・キリストの恩寵」を得て、二進も三進も行かない危機を脱出できたわけである。

もう一人の獲物と狙われた老婆はどうであろうか。今度も the Summoner が、兄弟の悪魔に向かって二度目の「悪魔」の囁きをする (1572)。そして何の咎も無い老婆を裁判所に召喚してやると脅して金を巻き上げようという彼の「金儲け」のやり方を悪魔に披露する。ところが、金を渡せば、召喚せず放免してやる (1599) という脅しに対して、貧しく哀れな、寄る辺無き身の老婆は、「聖母マリア (lady Seinte Marie, 1604)」の「恩寵」を求める。

So wisly help me out of care and synne,
This wyde world thogh that I sholde wynne,
Ne have I nat twelf pens withinne myn hoold.
Ye knowen wel that I am povre and oold;
Kithe youre almesse on me, povre wrecche.” (1605-9)

この咎無き老婆の拒絶に対して、the Summoner は、老婆から慈悲心 (almesse, 1609) を求められても、次の様に無碍に拒絶する。

“Nay thane” quod he, “the foule feend me fecche
If I th’excuse, though thou shul be spilt!” (1610-11)

この「邪悪な悪魔がわしを捕らえるがよい」という the Summoner の言葉は彼の「本心」から出た言葉であろうか。

金を渡さなければ、アンナ聖人にかけて (by the sweete Seinte Anne, 1603) (利己的で、悪い誓言である)、新しい鍋を借金のかた (偽りの請求) に持っていくぞと老婆を脅すが、こ

れまで宗教裁判所に召喚されたことも無く、間男を受け入れた事も無い彼女は、the Summoner に罵りの言葉を吐く。

Unto the devel blak and rough of hewe
Yeve I thy body and my panne also!" (1622-3)

これを聞いて悪魔は、これが老婆の「本心」かどうかを確かめる (1627)。老婆の言葉は、「本心」から出た言葉で、更に the Summoner を罵る。

"The devel," quod she, "so fecche hym er he deye,
And panne and al, but he wol hym repente!" (1628-9)

初めの罵りとは違い、この罵りにおいて老婆は、the Summoner に「悔い改め」(repente 1629) の最後の機会 (悪魔に捕らわれないための) を与えているにも関わらず、彼の「本心」(entente, 1630) は、"repente" しない事だと言う。ここに先程言及した「邪悪な悪魔がわしを捕らえるがよい」という the Summoner の言葉と本心の一致を見る。

この the Summoner の「本心」を聞いた悪魔は、彼に向かって地獄に行き、悪魔の秘密 (1637) を「知る」ことになると言って、ヨーマンと偽る the Summoner を捕らえる。

Thy body and this panne been myne by right.
Thou shalt with me to helle yet tonyght,
Where thou shalt knowen of oure privetee
Moore than a maister of dyvynytee." (1635-8)

悪魔が言うには、the Summoner の身体も老婆の鍋も受け取ることは当然の権利で、自分の物 (老婆の言葉と本心の一致による) と言い、代々 Summoner たちのいる地獄へと身体も魂も共に連れて行く。

And with that word this foule feend hym hente;
Body and soule he with the devel wente
Where as that somonours han hir heritage. (1639-41)

こうしたことから、なぜ the Summoner は悪魔に捕らえられて、他方馬方は捕らえられなかったのか、その理由が明らかになる。

馬方は罵りの言葉を吐くが、それが本心から出た言葉ではない事は悪魔もわかっており、更に馬方はイエス・キリストの恩寵を祈るという「正しい誓言」を言う。他方 the Summoner は、自らをヨーマンと偽り、悪魔と兄弟の契りを交わして、老婆の物を奪い取ろうと口に出す言葉は本心から出た言葉で、「悔い改め」もせず、キリストの恩寵を祈る事も無く、ただただ強欲な金儲けのみを考え、しかも悪魔をも恐れずに金儲けの事を臆面も無く悪魔に告げる。

他人の物を盗む the Summoner と本心と言う老婆との遣り取りを見る悪魔が、老婆の言葉通り the Summoner を獲物とすることは、悪魔の当然の権利 (1635) なのである。

悪魔は、彼の「誘惑」 (temptacioun, 1497) についてこう言う。

Whan he withstandeth oure temptacioun,
It is a cause of his savacioun, (1497-8)

悪魔の悪行の誘惑に逆らうことが、人間の魂の救済 (savacioun, 1498) の原因になると悪魔自身が断言する。ここで悪魔は神の代弁者としての役割を担う。

「悔い改め」に関しては、語り手 the Friar は、話の締めくくりにおいて、次の様に教訓を垂れる。

But for to kepe us fro that cursed place,
Waketh and preyeth Jhesu for his grace
So kepe us fro the temptour Sathanas. (1653-5)

イエス・キリストの恩寵を祈りつつ、現世では悪魔の「誘惑」に対抗し、悪行に対する「悔い改め」 (repente) をすることの大切さで締めくくる。

Disposeth ay youre hertes to withstonde
The feend, that yow wolde make thral and bonde.
He may nat tempte yow over youre myght,
For Crist wol be youre champion and knyght.
And prayeth that thise somonours hem repent
Of hir mysdedes, er that the feend hem hente! (1659-64)

こうした「誘惑」や「悔い改め」の観点から the Summoner を見ると、彼が悪魔の「誘惑」にのり「悔い改め」をしなかったことが、地獄行きに繋がるわけである。

人間は悪行をたび重ねたとしても、“repente” すれば、悪魔による捕らわれを辛うじて逃れ

ることが出来るわけである。

5

ここで “The Friars Tale” における the Summoner と悪魔の関わりをまとめておこう。

the Summoner が悪魔と関わりを初めて持つのは、獲物 (1376) を求めていた the Summoner が、ある日の事偽りの罪を思案して賄賂を取ろうと寡婦の老婆のもとに向かっていった時のことで、the Summoner の前に行く馬に乗るヨーマン (yeman) を見る。この男は、緑色 (悪魔を連想させる色) の上着 (1382) を着て、黒縁の帽子を被る。the Summoner は、この時このヨーマンが悪魔とは知らない。

ヨーマンは、the Summoner に行き先を尋ねる。その時 the Summoner という自らの身分に憚り (verray filth and shame, 1393) を感じて、自分は、主人の代わりに地代を取り立てに行く、法の執行吏 (a bailly; bailiff, 1392) だと答える。それに対してヨーマンは、the Summoner に対し自分も執行吏だと言う。二人共に自分の身分を偽る。

ヨーマンは、the Summoner に対し兄弟 (broetherhede, 1399) になって欲しいと頼むと、the Summoner も異存なく「兄弟の契り」(sworne bretheren, 1405) を結ぶ。だが「偽りの契り」である。

この the Summoner は、お喋りな男で、ヨーマンからいろいろ聞き出す。住まいを聞かれてヨーマンは、こう答える。

This yeman hym answerde in softe speche,
“Brother,” quod he, “fer in the north contree,
Whereas I hope som tyme I shal thee see. (1412-4)

ヨーマンは、「兄弟」に「やさしく」(softe) 語りかける。読者 (聴衆) は、服の色とか住まいの場所 (北の国とは悪魔の住む所) を知るにつれて、じわりとヨーマンが悪魔であり、the Summoner の身に危険が迫りつつある状況を知る。じわりとやさしく the Summoner に近づくヨーマンである。

ヨーマンが悪魔であることにいまだ気づかない the Summoner は、契りあった兄弟に金儲けのやり方の教を率直 (faithfully) に乞う。

“Now, brother,” quod this somonour, “I yow preye,
Teche me, whil that we ryden by the weye,
Syn that ye been a bailliff as am I,

Som subtiltee, and tel me faithfully
In myn office how that I may moost wyne;
And spareth nat for conscience ne synne,
But as my brother tel me, how do ye.” (1417-23)

契り合った兄弟であることを強調し、同じ職業（法の執行吏）にあるものとして、金儲け（実は盗み）のことを誠実に（faithfully, 1420）に話すように the Summoner は、ヨーマンに求める。それに対しヨーマンは、本当の話（faithful tale, 1425）を語る。

“Now, by my trouthe, brother deere,” seyde he,
“As I shal tellen thee a faithful tale,
My wages been ful streite and ful smale.
My lord is hard to me and daungerous,
And myn office is ful laborious,
And therefore by extorcions I lyve.
For sothe, I take al that men wol me yive.
Algate, by sleyghte or by violence,
Fro yeer to yeer I wyne al my dispenche.
I kan no bettre telle, feithfully.” (1424-33)

狡い才覚を働かし、人を騙し、腕力に訴えて、生活費を稼ぐというヨーマン（悪魔）に対し、the Summoner は、それに呼応して極めて「率直に」（faithfully, 1433）自分も同じ事をやってきたと己の「悪行」を告白する。

“Now certes,” quod this Somonour, “so fare I.
I spare nat to taken, God it woot,
But if it be to hevy or to hoot.
What I may gete in conseil prively,
No maner conscience of that have I.
Nere myn extorcioun, I myghte nat liven,
Ne of swiche japes wol I nat be shriven.
Stomak ne conscience ne knowe I noon;
I shrewe thise shrifte-fadres everychoon.
Wel be we met, by God and by Seint Jame!

But, leewe brother, tel me thanne thy name," (1434-44)

the Summoner は、人知れず人の物を盗る。良心も慈悲心も無い。告解もしない。赤裸に心を許す兄弟におのれの「実体」を「率直に」語るばかりである。

ヨーマンに、the Summoner が最後に彼の名前 (1444) を尋ねると、自分は「悪魔」(a feend, 1448) であって、「地獄」(helle, 1448) に住み、この世の果てまでも the Summoner と同じ動機 (entente, 1452) で、the Summoner と同様に手段を選ばず、財産獲得の為に馬を乗り回すと告白する。

この様に「悪行」を通して、the Summoner が悪魔と同じ穴の貉である事 (実体) が明白となる。

the Summoner は、ヨーマンが悪魔であると知った後でも、悪魔を恐れる事も無く悪魔に名前、姿、骨折りなどについて、畳み掛けてたずねるわけであるが、それは悪魔についての彼の強い好奇心、知識欲を示す。そしてその尋ね方も、皮肉なことに (偽りの兄弟関係である事も知らず) 「誠実に (faithfully, 1504)」である。

ヨーマンが悪魔と知る時も、the Summoner は人間の姿 (a mannes shap, 1458) をしているヨーマンがまさか悪魔とは思わず、見かけの「姿」でしか判断しない。悪魔は地獄では決まった姿をせず (1461)、人間、猿、天使などの姿を見せるといふ。the Summoner はなぜ様々な格好で往来するか (1470) と「姿」にこだわるのに対し、ヨーマンは、獲物を獲るのに一番相応しい「姿」をとる (1472) からだと説明する。見かけ (姿) でしか判断しない the Summoner である。

the Summoner は悪魔との関わりを見ると、兄弟の契り (しかし偽りの関係に基づく) を結び、悪魔を恐れず、一緒に獲物を求め、獲物も平等に分けるといふ悪魔との共存関係を示すが、獲物を捕らえるため「姿」を様々に変える悪魔に、彼はなぜその様な「骨折り」(1473) をするのかと問うと、悪魔は、人の知恵を次の様に言う。

I wol entende to wynnynge, if I may,
And nat entende oure wittes to declare,
For, brother myn, thy wit is al to bare
To understande, althogh I tolde hem thee.
But, for thou axest why labouren we—
For somtyme we been Goddes instrumentz
And meenes to doon his comandementz, (1478-84)

悪魔も「神の道具」(Goddes instrumentz, 1483) であって、その為に様々な姿をとる。悪魔

は神の前では非力である。ここでこういう事をわからない人間の知恵 (wit, 1480) の浅はかさを指摘する。

the Summoner と悪魔との関わりからは、結局 the Summoner という浅はかな「悪行」の人間の有様が見えて来る。

6

The Friar's Tale (「托鉢修道士の話」) において、語り手 the Friar (托鉢修道士) の語る the Summoner (教会裁判所召喚吏) に一つのアイロニーを見る。the Summoner は、罪無き人々から金を巻き上げようと獲物を求めていたはずであるが、旅を共にする「誓い合った兄弟」であるはずのヨーマン (実は悪魔) によって獲物となり、地獄に連れ去られる。獲物を狩っていると思う (見掛け) the Summoner が、自分の知らない間に、悪魔に獲物狩りの対象になっていた (実体) という “hunters hunted” の見掛けと実体の食い違いによるアイロニーである。the Summoner の見る現実と読者 (聴衆) の見る現実の現実認識についての食い違いによるアイロニーである。

チャーサーは、このアイロニーを強調するために、the Summoner の性格形成に幾つかのエピソードを差し挟んでいる。

the Summoner は、悪魔との遣り取りにおいて「好奇心」を示し、「悪魔」に名前を尋ね、なぜ様々な姿を取るのか、なぜその様な骨折りをするのかと問うが、悪魔は、the Summoner 自身気付いていない、悪魔の知恵には及ぶべくも無い人間の浅薄な知恵 (wit, 1480) を、彼に指摘する。the Summoner は、悪魔に次々と問いを投げ掛けるという悪魔についての好奇心を披瀝しているのである。

かくして悪魔についての知識は得るが、自分の浅知恵に気付くことはない。“hunters hunted” のアイロニーにおいて the Summoner は、結局は悪魔に捕らわれて、地獄を経験 (experience, 1517) し、本当に地獄を「知る」ことになる。

the Summoner は、悪魔との間に兄弟の契りを結び、悪魔に捕られるまで両者の間の friendship を信じ、“faithfully” に悪魔に接し、更にはヨーマンが悪魔と知った時ですら悪魔を恐れない。更に両者の関係も「偽り」の身分と「偽り」の兄弟の契りに基づいているわけで、信じていた悪魔に結局捕らわれてしまう。悪魔に捕らわれても仕方の無い「偽り」の現実認識に捕らわれた盲目の姿を、the Summoner は読者 (聴衆) に見せる。

7

それでは “hunters hunted” のアイロニーから見えるものはどのようなものか。それは、悪魔

の誘惑を逃れ、イエス・キリストの恩寵による、悪行を重ねる人間に対する「救済」の道である。そしてその決定的な点は、「悔い改め」(“repente”)なのである。最後に「悔い改め」(改心)をすれば、人は神によって救われるわけである。

「神の道具」としての悪魔と愚かな the Summoner の姿を通して、語り手 the Friar は、「教訓話」(exemplum)としての“The Friar’s Tale”において、一つの教訓(a moral)を伝えようとしている。

注

1. 原文引用は、Larry D. Benson(ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1957)に依る。本文中の数字は、行数を表す。
2. *Ibid.*, p. 11.
3. Cf. “their animosity reflects the rivalry between mendicants and secular clergy that arose in Paris in the mid-thirteenth century and later spread to England.” (*Ibid.*, p. 874)